悠久の名作シリーズ（17）

『度桑乾』　賈島

住めば故郷か、深まる郷愁か

度桑乾　賈島

客舎幷州已十霜
歸心日夜憶咸陽
無端更渡桑乾水
卻望幷州是故郷

桑乾を度る　賈島

客舎幷州已に十霜
歸心日夜咸陽を憶う
端無く更に渡る桑乾の水
卻って幷州を望めば是故郷

【字解】

桑乾　桑乾河。山西省大同県の南から、北京場外に流れる。今は下流を永定河という。ここでは北京近くではなく、上流の山西省北部の流れを指す。

客舎　旅館。ただし、ここでは旅館住まいをする、つまり故郷を離れてすむこと。「客」は「家を離れている」状態。

幷州　今の山西省太原市。

十霜　十年。「霜」は「星霜」に同じ。

歸心　故郷に帰りたいと思う気持ち。

憶　思い出す。咸陽は遠くにあってみることができないので「憶」という。

咸陽　秦の古都。今の陝西省咸陽市の東北十キロにあった。渭水（いすい）の北にあって南にある長安と相対する。唐の都長安と隣接した位置にあるので、唐詩では、長安を指すのに咸陽の地名を用いることが多い。古地名を用いて作品に歴史的厚みを持たせるためである。

無端　理由もなく、転じてはからずも。なおこの句「無端」は、期待に反していよいよ故郷から遠ざかってしまうという皮肉な自分の運命に向けて発せられたものであろう。

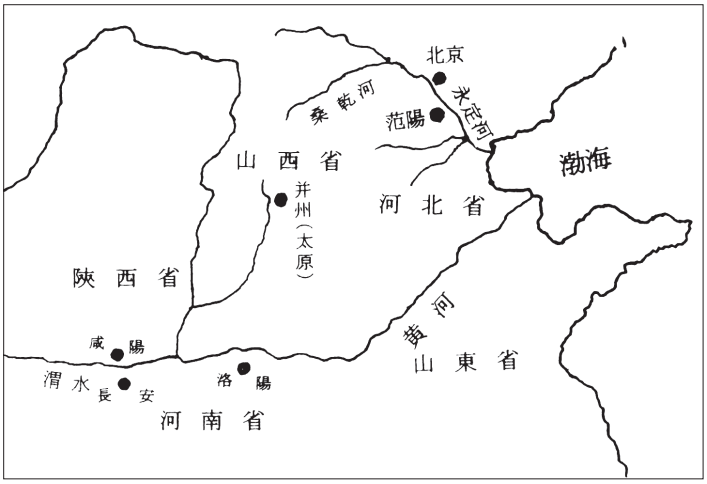
更渡桑乾水　「水」は、ここでは川。「更」は、故郷に帰るどころか、さらに故郷を離れての意。并州にいた作者にすれば、故郷（咸陽）とは反対方向、すなわち北に向かって桑乾河を渡ることになる。

卻　振り返って。

松浦友久『中国詩選（三）』に『卻』は文字どおり振り返って并州を見る動作であるが「同時にそれが思いがけず故郷のような親しさで我が眼にうつるというその予想もしなかった心情を、語感のうえで巧みに重ね合わせている」という指摘がある。

【意　解】

并州での旅暮らしも、早もう十年・その間、帰りたい一心に、明けても暮れても、故郷（咸陽）を思い続けてきた。ところが、この度はからずもまた、更に（北に向かって）桑乾河を渡ってこの土地を去ることになり、振り返って并州の町を眺めるとそこが今は故郷のようにさえ思われる。



【鑑　賞】

この詩の見どころは、第四句にある。つまり、いやだと思っていた并州が、もっと遠くへ行かなければならなくなってみると、むしろ懐かしく、故郷のように感ぜられる。

普通の望郷の詩を一ひねりした妙味がここにある。そしてこれは、だれでもよくわかり、経験もすることであるか

らこそ、こう詠われてみて、なるほどうまいことをいうものだ、と思わせるのである。前半は、後半を導く伏線となっている。并州に十年もいて毎日毎夜咸陽（長安）へ帰りたいと思っている、と強く詠うことによって、それなのに咸陽とは逆の方向へ行くはめになったということの重みが伝わる。

「桑乾」などという、耳なれぬ河を渡ってさらに遠く行く、というところに、やり切れぬ旅を行く作者の姿が目に浮かぶようである。「并州」の語が、最初と最後の句に対照的に用いられているのも、印象的である。

【考　察】

第四句「卻望并州是故郷」の解釈には諸説がある。

A節は「今まで仮の宿りとばかり思っていた并州、さてここを離れるとなると、十年間も住みなれた町だけに実の故郷のような気がして懐かしい」という自然の情を詠んだものとしてとっている。

B節は「并州が故郷である」という言い方によって、さらにはるか向こうの故郷（咸陽）をなつかしむ気持ちを表しているのであり、本心から并州を故郷と思っているわけではない、という理解の仕方である。

【参　考】

この詩には土岐善麿の翻訳詩がある。

桑乾を渡る　　土岐善麿訳

并州の旅居　はや十年を過ぎて
咸陽へ帰らんこころ　日も夜も切に
ゆくりなく更に　桑乾の水を渡れば
并州ぞなかなかに　ふるさとなりける

また、この詩に触れた松尾芭蕉は、初めての紀行文「野ざらし紀行」で次の俳諧を詠じている。

秋十年　却って江戸を　指す故郷

（住みなれてもう十年、今故郷へと向かいながらも、かえって江戸が懐かしく、真実の故郷のように思われることだ）

【作　者】

賈島（七七九―八四三）

中唐の詩人。字は閬（浪）仙、代宗の大歴十四年の生まれ、范陽（河北省）の人、浮屠（僧侶）となり、無本と号し洛陽の青龍寺（空海も修行をした寺）にいた。京兆尹（京師の長官。都の衆務を掌る）である韓愈との出会いは「推敲の故事」で有名であり、韓愈のすすめで還俗した。幾度か科挙に失敗したが遂に進士に及第。しかし官界に於いて不運であり、文宗の時四川省長江の主簿となり、賈長江と称された。次に普州（四川省）府の司倉参軍に任命されたが

悲運にも赴任しないうちに病没した。

賈島といえば、苦吟者の代表のように言われ、五言律詩を善くし、清峭幽僻、つまり清くすぐれているが奥深く片寄った所があると評されながらも一家を成している。

「二句三年得　一吟双涙流　知音如不賞　帰臥故山秋」（二句三年にして得、一吟双涙流る。知音如し賞せずんば、故山の秋に帰臥せん）はその詩にうちこむ態度がうかがわれる。

毎年の大晦日、自作の詩を祭って祈ったということが祭詩の故事となり、晩唐の李洞が賈島像を鋳造して師事した逸話がある。

宋代になって、永嘉四霊と言われた四人の詩人或いは江湖詩派と言われた詩人たちにも影響を与えている。

詩集は「賈浪仙長江東」十巻、四百三首が残り、「全唐詩」では四巻を編集している。

【推敲の故事】

賈島は進士に合格するまでには非常に苦しい生活を送っていた。そのため物乞い坊主として人の門に立って歩くような生活であった。

しかし作詩に熱中すると偉い人が町を通っても、それに気が付かなかったという。

そんなある日、京師に赴いた時ロバに乗ってふと「閑居少隣並　草径入荒園　鳥宿池辺樹　僧？月下門」という詩を得た。しかし？印のところを「推」にすべきか「敲」にすべきか迷い夢中で考えているうち、うっかり行列に突っ込んでしまった。それは都の長官で高名な詩人でもある韓愈の行列であった。当然賈島は捕らえられて韓愈の御前に引き据えられた。

なぜロバを止めなかったのかという質問に賈島は「『推』にすべきか『敲』にすべきか迷っていて行列に気づきませんでした」と話すと、韓愈は唐代を代表する詩人であり、「敲」がよいと教えられ、二人の親交が始まった。

この後、詩文の字句をいろいろと練り直すことを「推敲する」いうようになった。

（ちなみに、他人がするのは「添削」）

【備　考】

作者については異説があり、劉阜の「旅次朔方」（朔方に旅して次る）として載せられている。

劉阜については「全唐詩」小伝に、貞元年間の人とあるのみで詳しい経歴はわからない。しかし、どちらが実際の作者であるかについては、すでに李嘉言「賈島年譜」（商務印書館）に賈島の作ではない、と指摘されている。その理由としては、①賈島の故郷は范陽であって咸陽ではないこと、②賈島とも交際のあった令狐楚（七六六―八三七）

編集の「御覧詩」に劉阜の作として掲載されている。

さらに、「唐詩鑑賞辞典」（上海辞書出版社）は、劉阜の作として載せたうえで、賈島の作でない理由として、賈島の作品や交際関係のあった詩人の伝記のうちにも并州の長期滞在の記録がないこと、またこの詩の風格が、賈島の作品と似ていないことも付け加えている。

「唐詩大系」「唐詩選注」などは劉阜の作としており、現在では賈島の作でないことが通説化しつつあるようだ。

貧乏な詩人の旅(明・黄鳳池『唐詩画譜』より)